

子どもにとって「よい絵本」とは —保育における絵本選択に向けて—

初等教育教員養成課程 幼児教育選修 覚田 美紅

1. 研究目的

保育ではよく絵本の読み聞かせが行われるが、その絵本を選ぶ際、保育者はつい似たような絵本を手に取りがちである。しかし、子どもたちは一人一人性格も好きな遊びも違うように、絵本に対する好みも異なるため、保育者が思う「よい絵本」と子どもが思う「よい絵本」は必ずしも一致しない可能性がある。そこから、本研究では文献調査と質問紙調査により、子どもにとって「よい絵本」とはどのような絵本であるのかを明らかにし、それを踏まえた上で保育者としてどのような絵本を読み聞かせるべきか、また環境として用意すべきかを考える。

2. 「よい絵本」とはどのようなものか

ここでは、絵本の研究者が「よい絵本」をどのような絵本だと捉えているのか追究する。

松井¹は『絵本をみる眼』の中で、「よい絵本」とは“確かな手ごたえのある世界がある絵本で、子どもが我を忘れて入り込める絵本”だと述べている。これについて、まず、文章だけで様子をありありと想像させる絵本には、子どもが我を忘れて入り込めるようである。

次に絵について、松井は、“物語を語る力をもった絵”であることが大切であり、そうであるためには「絵と絵のつながり」と「イメージの発展による物語の展開」が必要だと考える。また永田²は、対象を丁寧に、なおかつ無駄なく描いた絵本が良いと考えている。色づかいについては、色を見ただけで楽しい気分になれることを、絵本に求められる条件だとしている。さらに文章と絵は別々に存在するのではなく、物語と絵の調和も必要な要素である。

永田は、登場人物について、登場人物の気持ち

や行動が認められることや、読者である子どもと同じ年ごろの子どもが登場することを評価している。また、印象に残る「よい絵本」にはお話と連動させて「見せ場」がいくつか設けられていると述べている。

3. 絵本に関する質問紙調査

(1) 調査の概要

子どもがどのような絵本を「よい絵本」だと思っているか知りたいと考え、質問紙調査を行った。ただし、子どもにとってそれを言葉で表現するのは難しいと考えたため、調査は大学生に幼少期を思い出して記述してもらうという方法をとった。

A大学の学生190名を調査の対象とした。質問紙調査の回収数は134名で、回収率は70.5%。男女比は、男性26名、女性108名。また調査は2013年5月中旬に行った。

〔問1〕では幼少期に好きだった絵本のタイトルを書いてもらい、その絵本についてどのようなことが印象に残っているか、自由記述方式で回答を得た。〔問2〕では9冊の絵本を挙げ、読んだことのある作品の番号に丸をつけてもらった。

(2) 調査の結果〔問1〕

自由記述での回答を、絵、文章、食べ物、登場人物という要素に分けて分析した。

① 絵

回答を分類すると、「カラフル」「きれい」「かわいい」「雰囲気（やさしい、ほのぼの等）」などの明るい要素をもつ絵本が、多くの子どもを惹きつけることが分かった。また「細かい」「丁寧」といった絵そのもののよさが味わえる絵本に、心を惹かれる子どもも多かった。その一方で「おもしろい」とユニークさのある絵本や、「怖い」「怪しげ」「迫ってくるよう」「疾走感」といったドキドキ感

を味わえる絵本、「色味が良い」という大人っぽい要素をもつ絵本を好む人もいることが分かった。これらのことから、絵についての好みは一つに絞ることができず、保育においては一つの要素に偏らない絵本選びをする必要があるといえよう。

② 文章

文章について触れている回答は 19 件と少なく、絵本を読む時には特定の文章よりも全体の話の内容や雰囲気、絵などに意識が向きやすいのではないかと考えられる。そのような中で言葉に意識を向けることのできる絵本とはどのようなものかを検討した。

文章に関する記述で目についたのが「リズム」「リズムカル」という言葉である。このように「リズムカル」という意見と共に挙げられている絵本には、歌のようなリズムがついていた。リズムの心地よさによって、また何回も読んでもらって節を覚えることによって、これらの絵本が印象に残っていくのだろう。

③ 食べ物

回収したアンケートを見ると、「おいしそうだった」という記述が非常に多いことに気付いた。食べ物が出てくる絵本はたくさんあるが、その中でどのような絵本が「おいしそう」という印象をもたせるのか検討した。

『ぐりとぐら』で「おいしそう」と思わせる要因は、カステラができる場面の描き方と、その場面に至るまでの過程が重要だと考えられる。絵本の中のみんなが出来上がりを楽しみにする様子には、幼い子どもでも経験があるため、共感することができ、「おいしそう」とまるでその場に居合わせているかのように感じることもできるのだろう。

『からすのパンやさん』では、作っているときには小さくて白いパンの生地が、焼きあがると大きくこんがりと、色つやたっぷりに描かれている。このギャップが印象に残り、読み手に「おいしそう」と思わせるのではないかと考える。また、多くの人が、見開きいっぱいには 84 種類のパンが登場

する場面のことを記述していた。種類の多さと意外性のあるパンが、「もっとよく見たい」という気持ちを起こさせ、読み手をわくわくさせるのではないかと考える。

また、テーマが食べ物とは関係ない絵本でも食べ物に対する反応が大きいことから、子どもの食べ物への興味の強さがうかがわれる。

④ 登場人物

アンケートでは【○○シリーズ】という回答が多数見られたことから、登場人物も絵本の好みに影響しているのではないかと考えた。しかし、回答はさほど集中しておらず、登場人物に対する好みは人によって異なるようだ。また、登場人物を気に入った理由を分類すると、「かわいい」「かっこいい」と登場人物に憧れる気持ちや、「ユニーク」「不思議な生き物」などおもしろいと思う気持ち、「気持ち悪さが何となく心地よい」「雰囲気が好き」など居心地のよさを感じる気持ち等、こちらも好みは様々である。

(3) 調査の結果【問2】

表 1 絵本のタイトルと、その絵本を読んだことがある人の数

絵本の タイトル	読んだことがある人の数(%)		
	幼児教育 選修	その他の 専攻	合計
ぐりとぐら	66(94.3)	55(85.9)	121(90.3)
おおきなかぶ	54(77.1)	54(84.4)	108(80.6)
はらぺこあおむし	60(85.7)	48(75.0)	108(80.6)
ねずみくんのチョコ キ	50(71.4)	34(53.1)	84(62.7)
三びきのやぎのがら がらどん	39(55.7)	28(43.8)	67(50.0)
ノントンぶらんこの せて	32(45.7)	32(50.0)	64(47.8)
はじめてのおつかい	36(51.4)	19(29.7)	55(41.0)
わたしのワンピース	29(41.4)	2(3.1)	31(23.1)
ちいさなうさこちゃん	10(14.3)	1(1.6)	11(8.2)

〔問2〕で挙げた絵本と集計結果は以上の通りである。

表より、『ぐりとぐら』『おおきなかぶ』『はらぺこあおむし』は全体の80%以上の人に読まれており、よく読まれている絵本であることが分かる。これらの絵本はいずれも発行から30年以上たつベストセラーであり、長い間読み続けられることにはその絵本のよさがあるからではないかと考える。そこで、上位二冊『ぐりとぐら』『おおきなかぶ』のよさについて追究した。³⁴⁵

すると、『ぐりとぐら』は「絵や登場人物のかわいさ」があり、「子どもの経験に合ったストーリー展開」で、「共感を誘い、引き込み、浸りきらせる」ことができる絵本であると分かった。一方『おおきなかぶ』は、「驚き」「興味」「サスペンス」「ユーモア」「満足感」という「子どもを惹きつける要素をもったストーリー」であり、見せ場において、「絵だけで見せたいものを十分に表現している」絵本であると分かった。

上記2冊それぞれがもつよさから導き出した、『ぐりとぐら』と『おおきなかぶ』の共通点は、

- ・ 物語の雰囲気合った絵や登場人物である
- ・ 子どもの経験に合ったストーリー展開である
- ・ 「驚き」「興味」「サスペンス」「ユーモア」「満足感」の要素で絵本の世界に引き込む
- ・ 見せ場で、絵だけで見せたいものを十分に表現している

となり、長い間読み続けられる絵本には、上記のようなよさが含まれるのではないかと考えられる。

4. 貸し出し数の多い絵本に関する調査

ここでは子どもたち自身が手に取って読みたくなる絵本の特徴を捉えることで、幼稚園や保育所における絵本環境を考える際に活かす。

(1) 調査の概要

Aこども園5歳児担当の保育士に依頼し、絵本の貸し出しカードを参照の上、絵本の貸し出し数

のランキングを作成していただいた。

(2) 調査の結果

表2 2013年度1学期 4歳児

1位	『ぐるんぱのようちえん』西内ミナミ作、堀内誠一絵、福音館書店、1966年
2位	『もりはおもしろランド 6 もりのレストラン』舟崎靖子作、舟崎克彦絵、偕成社、1984年
3位	『もったいないばあさん』真珠まりこ、講談社、2004年
4位	『11びきのねこ』馬場のぼる、こぐま社、1967年
5位	『はじめてのおつかい』筒井頼子作、林明子絵、福音館書店、1977年

表3 2013年度1学期 5歳児

1位	『おまえうまそうだな』宮西達也、ポプラ社、2003年
2位	【わんぱくだんシリーズ】ゆきのゆみこ・上野与志作、末崎茂樹絵、ひさかたチャイルド
3位	『改訂版きょうりゅうふしぎ図鑑』1995年、ひさかたチャイルド
4位	『おれはティラノサウルスだ』宮西達也、2004年、ポプラ社
5位	【14ひきのシリーズ】いわむらかずお、童心社

子どもたちが自分で手にとって読みたくなる絵本の特徴は、以下ようになる。

- シリーズ絵本
- 恐竜など興味を中心にあるものに関する絵本
- 話の長さが年齢に合っている絵本
- 図鑑(5歳)
- 自分でじっくり見ることができる絵本(5歳)

5. まとめ

文献調査と質問紙調査を合わせて考えると、子どもにとって「よい絵本」は、

絵	絵が物語の雰囲気に合わせており、物語や場面の様子をよく表している絵本
文章	物語の様子をありありと想像させる絵本、リズムの良い言葉が使われている絵本
登場人物	主人公が子どもと同じ年頃である絵本
ストーリー	子どもの経験に合った展開である絵本
見せ場	最後に見せ場のある絵本

ということができる。

また、貸し出し数の多い絵本に関する調査より、幼稚園や保育所の絵本コーナーに用意するとよいと考えられる絵本は、

- ・ シリーズ絵本
- ・ シリーズ絵本以外で、保育者が子どもに読んでほしいと思う絵本
- ・ 子どもが興味をもっているものに関する絵本
- ・ 絵を見ただけで話の筋が分かりやすい絵本
- ・ 細かい所まで丁寧に描かれた、自分でじっくり見ることのできる絵本

となる。

研究を通して、今まで自分では選ばなかった絵本にも興味がわくようになった。これから保育者として読み聞かせや、絵本コーナーの環境を考える際に、この研究で得た選び方を生かしていきたい。また、今回あまり詳しく取りあげなかったのだが、アンケートの中には「絵本を見て、(料理、遊びなど)自分もやってみたいと思った」という記述が複数見られた。絵本は絵本として楽しむだけでなく、その後の遊びにつながることもあるのではないだろうか。これから現場で働く中で、絵本のもつ可能性を最大限生かしていきたい。

引用・参考文献

1. 松井直 (1978) 絵本をみる眼. 日本エディターズスクール出版部 pp.32-67
2. 永田桂子 (2007) よい「絵本」とはどんなもの?. チャイルド本社 pp.99-128
3. 佐々木宏子 (1975) 絵本と想像性—三才まえの子どもにとって絵本とはなにか—. 高文堂 p.6
4. 松井直 (1973) 絵本とは何か. 日本エディターズスクール出版部 p.85
5. 松井直 (1981) わたしの絵本論. 国土社 p.204